



No. 41

夏休みはこの博物館にとっても「かき入れ時」です。昨年夏の地質標本館も、その前後に比べて多くのお客様を迎えることができました。しかし今回の地質標本館便りでは、夏の活動の紹介は相談日の模様にとどめ、ちょっとおもむきを変えて、博物館学に対する館のささやかな貢献、具体的には博物館実習生の受け入れと他館に対する協力について、御紹介したいと思います。

博物館実習

教員免許取得に教育実習が必要なように、博物館実習は、博物館の学術的活動を支える学芸員の資格をとるために不可欠のものです。今年も、川村学園女子大から5人、千葉大から3人を実習生として迎えました(写真1)。

千葉大では、理学部の「ナチュラル・ヒストリー」の課程の一部として実習が位置づけられています。この課程は必ずしも資格取得を目的とするものではないとのことですが、実習においては博物館の学芸員の仕事は何たるかを、同じ体験をすることから学ぶことになっています。今年実習に参加した学生さんは、いずれも地球科学科在籍でしたので、一般的な博物館業務に加え、専門性を生かして標本の分類・整理に2週間おつき合いただきました。質・量ともにレベルの高い標本を相手にする仕事自体に感動したという実習の感想に、受け入れ側としては大変うれしくもありましたが、一方で理学部の教育課程で多様な地質試料を手にするチャンスが少なくなっている事実、一抹のさびしさを覚えたこともたしかです。

川村学園女子大の皆さんは、千葉大と逆に、文学部や社会教育学部に在籍する、文科系の人たちで、中には高校・大学を通して地学の履修経験のない人



写真1 博物館実習生による展示がえの作業。



写真2 河原の石から上流の地質がわかる!これで自由研究のメドが立ったと安心する子どもたち。遠路はるばる、重い石を持参し、ごろうさま。

もおります。1週間の実習内容は、どうしても受付や施設管理など一般的な館業務中心となりがちです。しかし今年は、あえて畑違いの博物館を実習に選んだ意欲を示してもらおうと、難解と言われがちな地質標本館の展示をわかり易く説明する工夫に挑戦して、レポートを書いてもらいました。レポートの内容は、今後一般向けの見学の手引きなどを整理する際に活用させてもらう予定です。

博物館実習生の受け入れは、所の技術指導のスキームに従って行っておりますが、現在以上の規模の拡大は難しいのも実情です。私達館員にとっても、若い人達のフレッシュな感性に触れる数少ない機会を、大切にしていきたいと考えています。

岩石・鉱物・化石相談と植物化石クリーニング

今年で13回目となった夏休み相談は、8月25日(金)に行われました。学園都市周辺を中心に30組(当日前後の相談を含む)が、夏休みの自由研究として集めた化石や河原の石などを手に、相談に訪れまし



写真3 大盛況の植物化石クリーニング。元職員の尾上さん(中央)は、大忙しでした。



写真4 名古屋市科学館で開催された「結晶の科学展」の風景(名古屋市立科学館提供)。

た。はるばる栃木県足利市から、渡良瀬川の河原の石をバケツに何杯も持参した親子もおりました(写真2)。この親子は、石の種類が分かっただけでなく、それが上流域の地質を反映することに驚いていました。

新設された多目的学習室では、元所員の尾上亨さんの協力を得て、植物化石のクリーニング体験を並行して実施いたしました(写真3)。こちらは、全部で104人が申し込む盛況ぶり。一時は廊下や通路に順番待ちの人があふれ、ついに整理券を発行するほどで、化石の担当者はうれしい悲鳴をあげておりました。

標本を通じた他館との交流

地質標本館収蔵の標本は、地質関係の試資料に乏しい他の博物館にとって大きな「魅力」になっています。あまり知られていませんが、館では収蔵標本の他館への貸出しを、毎年数件ずつ行っています。今年、名古屋市科学館の企画展「結晶の科学展」(1995年9月9日～10月29日)(写真4)のため、鉱物標本13点を貸出しました。この企画展では、酢酸ナトリウムの結晶成長や氷のチンダル像が観察できる実演コーナーや、塩の結晶を割ったり、水晶の隣りあう面と面との角度を測ったりする体験コーナーが用意され、子供たちは大変な興味を示していたとのことです。同時並行して「スミソニアン博物館 大宝石・鉱物展」が開催されたこともあり、期間中は来館者が16万人に達する盛況であったとのことです。

地質調査所の標本は「自然がつくりだす結晶のかたち」というコーナーで展示されました。主な貸出し標本は、山形県乙女鉱山産の水晶(日本式双晶)、鹿児島県串木野鉱山産の方解石(蝶形双晶)、メキシコ・チワワ産の石膏(燕尾双晶)、島根県松代鉱山産のアラレ石(輪転双晶)です。ここまで書けばお分かりいただけるように、貸出した標本は主に双晶した鉱物です。このような特徴ある標本を多数用意できるところは、国内にはそう見あたらないだろうというのが、私たちの自負するところです。

また、栃木県子ども総合科学館から紫外線によって蛍光を発する鉱物の展示についての相談を受け、岩塩(産地不明)、玉滴石(岐阜県蛭川村)、水垂鉛土(富山県亀谷鉱山)、灰重石(山口県喜和田鉱山)を提供しました。

地質調査所登録標本は、研究目的にも外部に提供されることがあります。この場合、結果を公表する際には、登録標本を利用したことを明示し、登録番号も合わせて表示することを原則としております。最近の例としては、福井県川俣産のザクロ石(GSJ-M18062)が、名古屋大学の研究者のザクロ石の研究に使われています¹⁾。

(奥山(楠瀬)康子, 坂野靖行, 山本良子, 豊 遙秋)

1) Enami, M., Cong, B., Yoshida, T. and Kawabe, I. (1995): A mechanism for Na incorporation in garnet: An example from garnet in orthogneiss from the Su-Lu terrane, eastern China. *Amer Mineral*, vol. 80, p.475-482.

<受付: 1996年1月8日>